

カナダにおける幼児教育

ヘリテージランゲージプログラム（異文化の中での民族継承語教育Ⅱ）

近江ひろえ
（金沢工業大学）

はじめに：第一報「異文化の中での民族継承語教育Ⅰ」ではヘリテージ・ランゲージ・エディケーション・プログラム日本語教育を受ける児童を持つ親の意識調査を基に「親の言語・文化継承」について考察した。その結果、親の言葉であり子の母語である日本語は親の考え、思いを伝えそして、日本の精神文化を継承させるためのコミュニケーションの手段として親にとっては絶対的なものであることを示す事ができた。又、異言語、異文化の社会において子の母語を保ち、習得させる事の必要性を理由付けする結果にもなりそれはヘリテージ・ランゲージ・エディケーションの存在理由を解明することにもつながった。第二報では、母語であり第一言語（L1）の日本語と第二言語（L2）である英語との関係に焦点を置いて追求する。

目的：L1がL2に移行する過程について追求する

対象：幼稚園で2年間の日本語教育を受け小学部に在籍する9才の児童を中心に構成された新移民者12家庭（日本人家庭11・日本人とカナダ人の家庭1）・31児童（第Ⅰ報と同一対象者）

方法：質問紙法（対象となる児童の母親が質問項目に記述する）（質問項目）

- (1) 言語環境（取り巻く環境）
- 1) きょうだい数
 - 2) 家庭内における使用言語
 - a) 両親間で使用する言語
 - b) 親子間で使用する言語
 - c) きょうだい間で使用する言語
 - 3) 出生順位・男女差について
 - a) 出生順位によって日本語の習得に差があると考えるか、ある場合、その理由
 - b) 男女によって日本語の習得に差があると考えるか、ある場合、その理由
- (2) 日本語を習得させる上で問題となる時期とその理由

結果と考察：調査項目の結果を表1～4に示した。

(1) 言語環境（取り巻く環境）

1) きょうだい数（表1）

2人	①②③④⑤⑥	6家庭（姉妹構成が2家庭）
3人	⑦⑧⑨⑩⑪	5家庭（兄弟構成が2家庭）
4人	△	1家庭

数字：各家庭を表わす ○：2人きょうだい（○ 姉妹構成）

□：3人きょうだい（□ 兄弟構成） △：4人きょうだい

2) 家庭内における使用言語（表2）

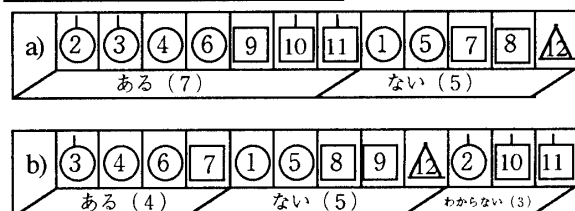
両親間の使用言語は日本人とカナダ人との1家庭をのぞき日本人家庭は日本語であった。また親子間の使用言語は日本語が6家庭、日・英併用が6家庭と半々だが、きょうだい間の使用言語は日本語の家庭はなく日・英併用が5家庭、英語が7家庭であった。その中で兄・弟、姉・妹のきょうだい構成の4家庭は親子間の使用言語は日英併用でありそして、きょうだい間の使用言語は3家庭が英語で他のきょうだい構成に比べより英語を使う傾向にあった。またきょうだい数との関係は数の多い方がより英語を使う傾向にもあり、きょうだい数、構成は言語の発達、獲得において大きな関係があると考えられる。両親間で使われている日本語は親子間→きょうだい間と次第に弱くなり年齢が高くなるにつれ子どもは、両親の使う日本語以上にきょうだい間で使う英語の影響を強く受け日本語→日・英併用→英語の過程を経て自分の触れる社会生活に必要な英語を獲得して行くものと考えられる。また家庭内の言語環境は子どもの言語変化に従って親も子どもとのコミュニケーションの手段として英語が必要になり日本語から次第に日・英併用に変化して行くものと考えられる。

2) 家庭内における使用言語（表2）

使用言語 間	日本語											日・英併用		英語			
a) 両親間	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪			△			
b) 親子間	①			④	⑤	⑥	⑦	⑧				②	③	⑨	⑩	⑪	△
c) きょうだい間												①	③	④	⑤	⑧	②

3) 出生順位・男女差について (表3)

3) a) 出生順位・b) 男女差 (表3)

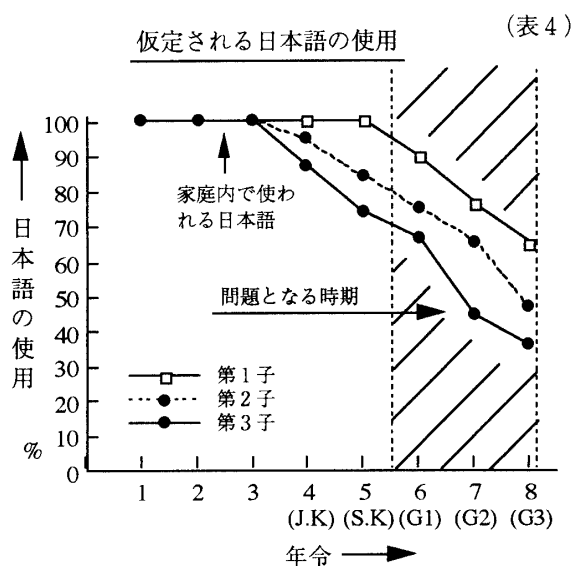


a) 出生順位: 「出生順位に差がある」と回答したのは7家庭であり出生順位に差があると考えられている。その中の5家庭の使用言語は親子間は日・英併用、きょうだい間では英語で、より英語環境が強い家庭と考えられる。その理由として「・第一子は親子間で日本語を通すことできたが第二子、第三子になるに連れてきょうだい間の会話が英語になり日本語を通すことが難しくなる。・第一子は第二子が生まれその子が英語を覚え、話すまで日本語しか話す機会がなく第一言語は日本語だが、第二子はきょうだい間の会話が英語が多いために日本語が定着しにくい。・第一子の場合、子どもと日本語で接することが多かったがきょうだい間の会話が英語になるに従って家庭内では日本語の量が減る。また、親が日本語学習にける時間や忍耐強さが第一子と第二子とでは異なる。・きょうだいの下に行くに従って日本語の発音に問題が生じ語彙数が少なくなる。」が挙げられた。その理由から、第一子は両親の日本語による働きかけ、話すことばを聞きコミュニケーションの手段として日本語をL1としてカナダ社会の英語に接するまで育つが、第二子は両親の日本語に加えて第一子の英語の影響を受けて育つ。第三子においては両親の日本語の影響以上にきょうだい間で使う英語の影響を強く受けて育ち第二子、第三子と下に行くに従い日本語はL1ではあるが第一子に比べてそれが次第に弱くなって行くと考えられる。そして、第一子が英語を習得していく過程は、家庭内言語環境を日本語から英語へと移行する過程とも考えられる。

b) 男女差: 男女差については、ある(4家庭)ない(5家庭)分からない(3家庭)であった。ある理由としては「・女の子は親からの話しかけ以上に自分から話すことが多く本が好きである。・男の子は低年齢ではことばの発達が遅いと感じる。」ない理由としては「・男女差ではなく性格の差であり内気な子とそうでない子ではかなりの差がある。内気な子は家で親と話す方が多くなるので日本語が定着すると思う。・子

どもによって違う。」が挙げられた。それは男の子と女の子では生活のしかた、遊びも違い女の子の場合は、母親と接する時間、場面も多くそこでの日本語でのやりとりの中から習得する日本語が多いと考えられる。また、子どもは性格、興味、知能にも個人的特徴があり言語の習得にも個人差は大きいと考えられる。

(2) 日本語を習得させる上で問題となる時期



その時期は小学1年・2、3年と考えられている。その理由として「・幼稚園は半日だが小学校に入学すると1日の学校生活に変わるため日本語に触れる機会が減る。(小・1)・英語の力が付き始め日本語と英語の比重が大きく変わり始める。(小・2・3)」が挙げられた。それは子どもの生活が家庭から半日教育の幼稚園そして一日教育の小学校へと変化しそれにともない言語環境も日本語と英語へと変化する。この二つの言語環境の中から接する言語の時間、その社会に適応するために必要な言語として幼稚園シニア、小学校入学以後に日本語以上に英語を習得し始めると考えられる。以上の結果・考察により第一、二、三子の日本語使用を仮定した(表4)。これはL1(日本語)がL2(英語)に移行する過程とも仮定することができる。

まとめ: 異言語社会の中で育つ子どもの言語発達に大きな影響を与える条件として彼らを取り巻く言語環境がある。その環境は家庭内、外に分けられそれらが社会適応時期と関連し、相互に影響を与えその子ども独自の言語発達、確立がなされると考えられる。